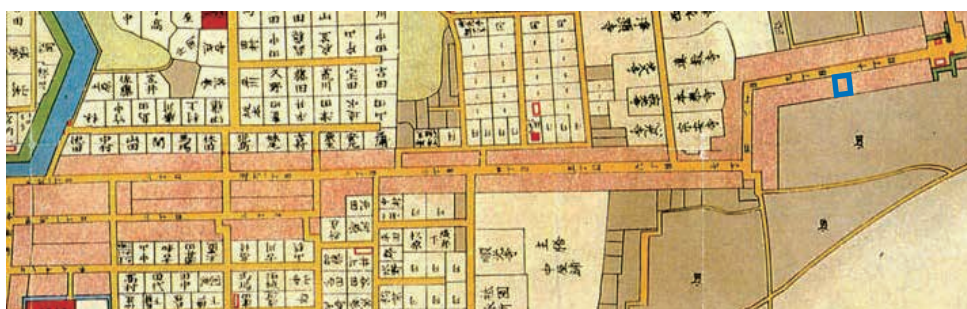


久留米城下町遺跡

(通町十丁目)

— 第22次発掘調査報告 —



天保年間久留米城下図 (『天保年間図』1830年～1844年頃)

Kurume Jōkamachi Site

- Report of 22th Survey at Tōri-chō 10chōme -

平成25(2013)年9月
久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後川の中流、筑紫平野の中心に位置し、古くから水陸の交通の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査では、城下町の町屋境がみつきり、今日の市街地に往時の城下町が今もなお残っていることを示しました。また、金属加工の道具をはじめとする多くの出土品は、江戸時代を生きた町人たちのエネルギーを今日に伝えていきます。この調査の成果が、今後の久留米市のまちづくりや文化の充実に貢献することを願ってやみません。

なお、今回の発掘調査に際して、有限会社森山電気商会の皆様にご多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成 25 年 9 月 30 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、店舗兼共同住宅建設に先立ち、平成 24 年度に有限会社森山電気商会の委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第 22 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した遺構配置図は、大淵文子、田中とし子、中野ゆみと西が作成し、当課の江頭俊介、古賀和子、米澤美詠子が浄書した。遺物実測図は江頭と西が作成し、古賀が浄書した。出土遺物観察表は古賀が作成し、西が編集した。
4. 遺構写真は、マミヤ RB67 を用いて西が撮影した。遺物写真はトヨビュー 45G II を用いて、当課の塚本映子が撮影した。なお、本文と実測図、観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標位は、世界測地系（新座標系）を基に作成した。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、以下のとおりである。
SE－井戸 SK－土坑 SX－その他の遺構
7. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号は LKM－022、調査番号は 201241 である。
9. 本書の編集は西が行った。
10. 表紙図版の青枠「」は、本調査区の位置を示す。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	9

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、店舗兼共同住宅新築に伴う事前の発掘調査である。平成24年11月21日、有限会社森山電器商会（代表取締役：森山勝憲、以下「地権者」）から、久留米市通東町113-6、113-4における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城下町遺跡の範囲内で、試掘でも遺構が確認されたため、12月10日に発掘調査が必要である旨回答した。12月13日、地権者から発掘調査の依頼が提出され、地権者と久留米市は12月17日に久留米城下町遺跡第22次調査の委託契約と協定書を締結した。発掘調査は12月25日より始め、翌平成25年1月18日に終了。その後、平成25年9月30日までに、遺物整理と報告書作成を行った。

2. 調査の体制（平成25年度）

調査主体：久留米市教育委員会	教育長：堤 正則
調査総括：市民文化部文化財保護課	部長：野田 秀樹、辻 文孝（平成24年度）
	次長：佐藤 光義
	課長：園井 正隆、古賀 正美（平成24年度）
	課長補佐兼課主査：宮崎 俊一
	課長補佐：白木 守、園井 正隆（平成24年度）
	課主査：白木 守（平成24年度）
	辻 義則（平成24年度）
	事務主査：塚本 映子
	庶務担当：豊福 早苗
	調査担当：西 拓巳
	整理担当：古賀 和子、中里由佳絵（平成24年度）

発掘調査臨時職員（平成24年度）

秋永 絹子、牛嶋 一男、大淵 文子、川原 初美、古賀 勝治、佐藤 朱美、高尾 幹幸
田中とし子、中野 ゆみ、溝口 輝男（五十音順）

発掘調査整理臨時職員

溝上 直子

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、江戸時代の城下町における町屋境の把握と、古代の遺構の確認を目的に実施した。平成24年12月25日、調査区の表土剥ぎを重機で開始。地表下30cmで幕末以降の遺構面に、50～60cmで近世の遺構面に、80～90cmで古代の遺構面に到達した。翌26日より作業員を投入し、遺構の掘り下げと測量、写真撮影を開始。年越しを経て、平成25年1月16日に全体写真を撮影。その後、

遺構を完掘して、1月18日に埋め戻しと機材撤収を行い、発掘調査を終えた。

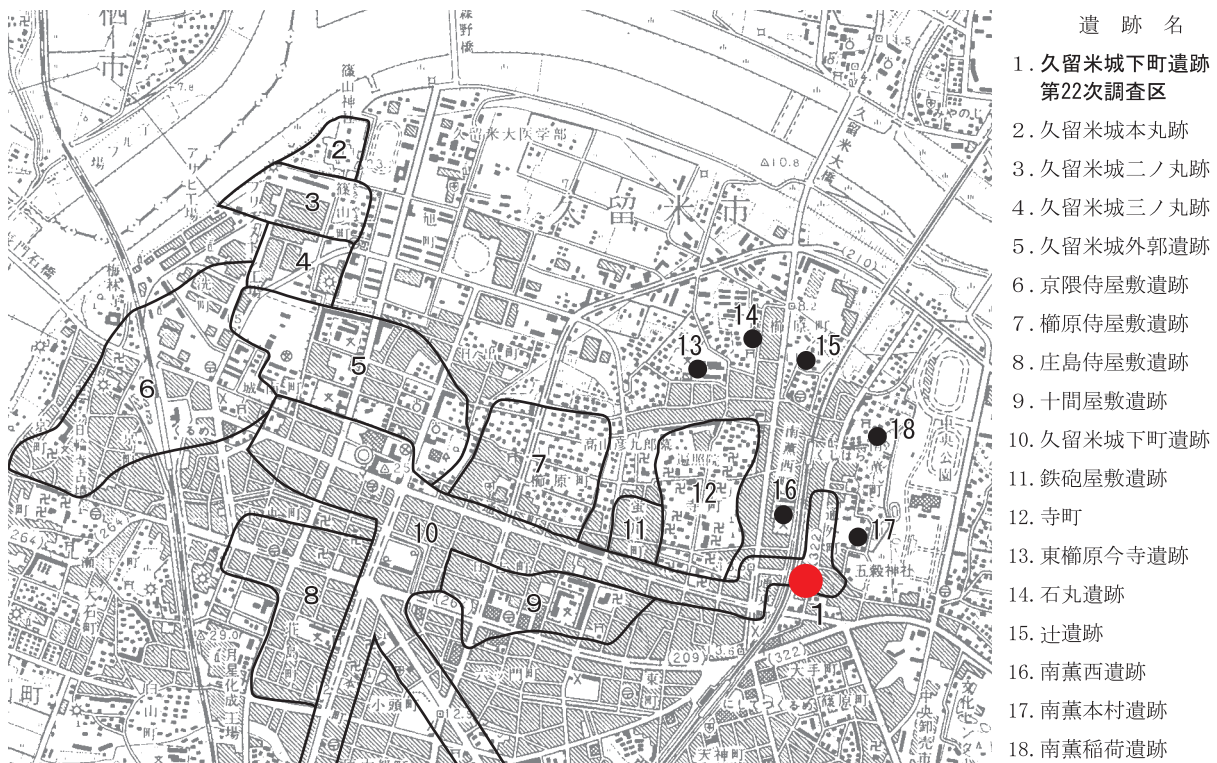
遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くんCubic」で編集・保存し、土層と埋甕は手測り（1/10）した。記録写真は、モノクロ・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

Ⅱ．位置と環境

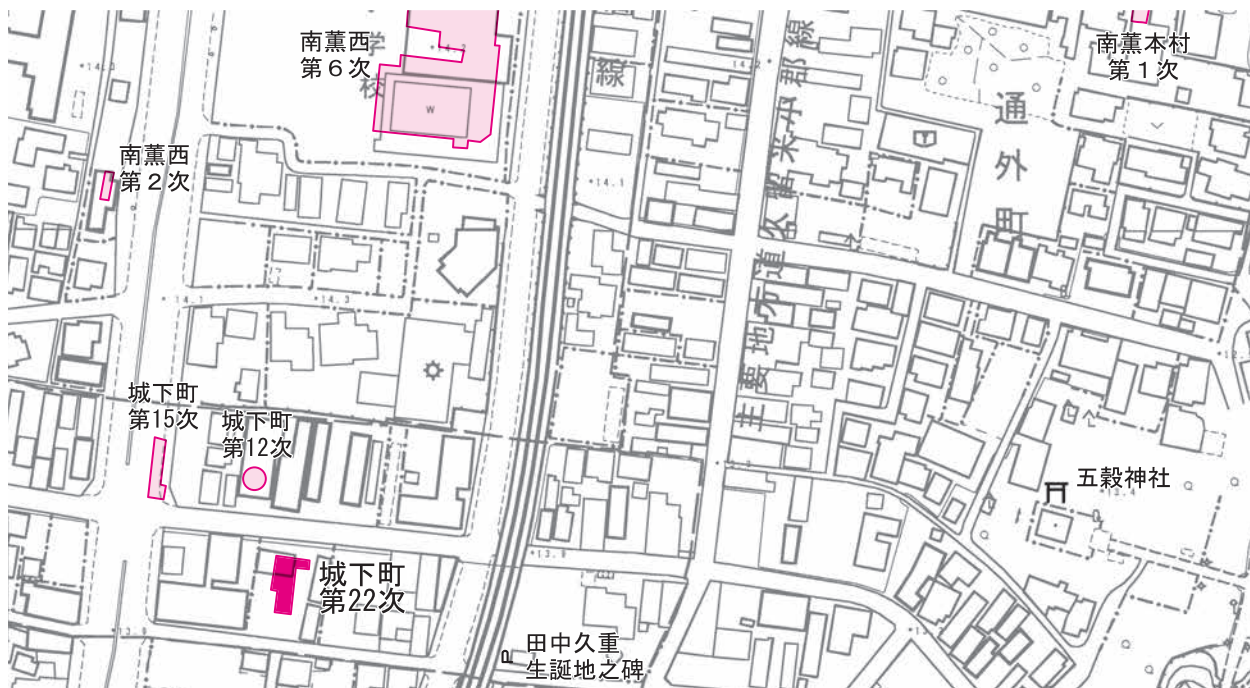
久留米市は筑紫平野の中心部、筑後川の中流域に位置する。筑紫平野を西へ流れる筑後川は、宝満川と合流して向きを南西へと変えるが、その左岸には筒川や高良川などの筑後川の支流に面して、低位段丘がいくつも形成される。久留米城下町遺跡は、この低位段丘群の南側に広がり、本調査区が位置する通町十丁目は、遺跡東部分の標高約13m付近に位置する。

周辺では、弥生時代に入ると遺跡の数が急増し、人々の活発な動きが窺える。東櫛原今寺遺跡では前期末の竪穴住居と貯蔵穴が、南薫本村遺跡では後期初頭の竪穴住居が検出された。辻遺跡では前期末や中期前半の竪穴住居に加え、後期の掘立柱建物が検出された。石丸遺跡でも、後期の竪穴住居が見つかった。こうした集落遺跡とは別に、甕棺墓などの埋葬遺跡も多数見つかっている。特に、石丸遺跡では148基にも及ぶ甕棺墓が確認されているほか、南薫稲荷遺跡では支石墓がみられる。このことから、低位段丘上で集落域と墓域が分かれていたことが示唆される。

承平年間（931～938）に成立した『和名類聚抄』には、筑後国御井郡八郷の一つに節原郷の名が見え、歴史地理学からも、筒川左岸に位置したと推測される。南薫西遺跡第6次調査では掘立柱建物群が見つかり、大量の墨書・刻書土器を伴う、節原郷の中心集落と考えられる。また、侍屋敷や



第1図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第2図 久留米城下町遺跡第22次調査区位置図 (1/2, 500)

城下町の下層で古代の遺構や土師器、須恵器が見つかることもあるが、いずれも散発的で、同時期の集落の様子は不明瞭である。節原郷には後に、櫛原荘と称する荘園が置かれた。『安楽寺草創日記』には、天徳4年(960)に大宰大監紀有頼が、筑後櫛原荘を菩薩装束とともに安楽寺に寄進したと記されており、櫛原荘が課税逃れのために寺院へ寄進されていた有様が窺える。辻遺跡で検出された13世紀後半から14世紀前半にかけての溝や、中世の土壌墓は、櫛原荘との関連を予想させる。

文献上での久留米城の初出は、天正11年(1583)に高良山座主の弟麟圭が久留米城に籠ったという記録である。天正15年(1587)の豊臣秀吉による九州国割で、筑後国の一部は小早川秀包に与えられた。関ヶ原の戦いの後には、田中吉政が新たに筑後国の領主となったが、二代忠政で田中氏は断絶して改易。元和7年(1621)、代わって丹波国福知山から有馬豊氏が久留米城に入城し、城郭の改修や侍屋敷・城下町の整備に着手した。通町十丁目は、通町で最後に整備された地であり、城下町の東端に位置する(表紙図版参照)。当初四丁目までしか整備されていなかったが、寛永4年(1627)に五丁目が整備されたのをはじめに、東へと延びていった。十丁目が完成したのは正保3年(1646)のことで、通町の整備が始まってから20年近くの歳月が経過したことになる。

からくり儀右衛門こと田中久重は、寛政11年(1799)に本町の鼈甲細工店で生誕した。既に15歳の頃には、五穀神社の祭礼にからくり人形を披露していたという。元治元年(1864)、久留米藩に招かれた久重は通町十丁目に製鉄所を設け、南薫町に移転するまで、この地で銃砲製造に携わった。

この地は周囲と比べて高台に位置するため、昭和28年(1953)の西日本水害でも水没を免れた。戦前から戦後にかけては、この良好な立地に様々な業種の店舗が立っていた。地元の方によると、かつては調査区北側の道路に面して、陸軍に刀を納品していた鍛冶屋や、油屋、酒屋、下駄屋、呉服店、洋品店などが並び、大いに賑わったという。

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序（第7図）

調査前の現況は更地であったが、以前は西側が地権者の事務所、東側が美容院だった。地表下20cmまでを、ガラスや近代の瓦礫などを含む暗褐色の表土が覆う。その下層30cmは、近代以降の整地で乱されている箇所もあるが、褐色粘質土や焼土、暗黄褐色砂質土などが、10cmずつ堆積している。この一連の堆積から、近世遺構面が複数あると判断した。近世遺構面の最下層は、焼土を含む暗褐色粘質土層である。近世遺構面の下層、地山との間に黒褐色粘質土が30cm堆積する。この層には、土師器や須恵器の破片がみられた。なお、標高約12.6mに広がる地山は、褐色粘質土だった。

2. 検出遺構（第3、15図）

今回の調査では、近世の井戸4基、土坑23基、境界遺構2基、胞衣埋納遺構2基、埋甕1基、その他のピット多数を検出した。一部のピットは包含層と同じ黒褐色粘質土で、1m以上の深さを有する。これらからは、遺物は一切出土せず遺構を構成するような整然とした配置ではない。

北側上層の遺構（第3、8図）

調査区の北側のみ、栗石が分布する幕末以降の遺構面と、黒色包含層直上の近世遺構面最下層の2面に分けて調査を行った。

S X 1（第3図） 調査区北側の中央部から東寄りで検出した、調査区外に延びる遺構である。完掘はしていないが、長さ3m以上、幅0.7～1mの溝に、拳大の丸石が詰めてあった。19世紀代の陶磁器や、半銭銅貨が出土している。

S X 7・9（第3、9図） いずれも、直径30cm、深さ20cmのピットに胞衣壺を埋めた胞衣埋納遺構である。遺構として検出したのは2基だが、表土剥ぎ時に同形の容器がS X 7・9付近から1個出土しているため、実際には3基あったと思われる。S X 7は直下に荒縄が残っており、荒縄で縛って埋めたのだろう。胞衣壺（1～4）については、遺物観察表1を参照されたい。

北側下層、調査区中央部・南側の遺構（第3、15図）

井戸

S E 35（第3図） 調査区中央部西壁で検出した。円形の井筒を有する。安全上、完掘していないが、直径80cm、深さ1m以上を測る。近世層から掘り込まれており、出土した陶磁器の年代も、18世紀から19世紀前半に収まる。また、出土した瓦は、いずれも被熱して変色していた。

S E 40（第3、10図） 調査区南端で検出した。安全上、深さ1.1mまでしか掘削しておらず、平面も最大幅2.5mを検出したに過ぎない。出土遺物は膨大で、その年代は18世紀後半の陶磁器から、二銭銅貨（75）までと幅広い。また、鉄滓やスラグ、そして金属滓が溶着した陶磁器碗など、金属加工に関する遺物が多数出土した。

土坑

S K 2（第3図） 調査区北側で検出した、長辺長2.15m、短辺長1.35m、深さ45cmの隅丸方形の土坑である。土坑内は、真砂土で満たされていた。出土遺物は少ないが、17世紀代の大甕の口

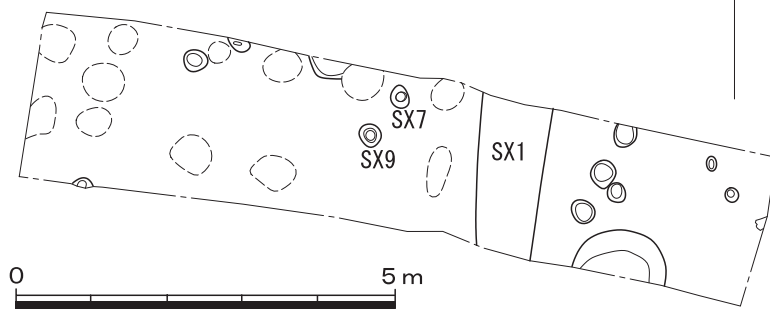
北側上層

※点線は栗石の範囲

X=35140.000

Y=-44410.000

Y=-44400.000



下層

※網掛けは黒褐色粘質土
ピット
点線は未掘および遺
構床面のピット

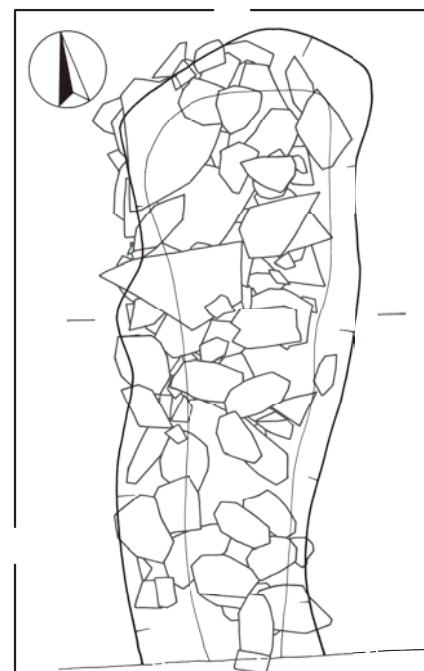
X=35140.000

Y=-44400.000

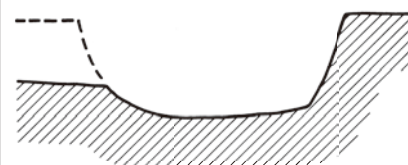


X=35130.000

Y=-44410.000



標高13.40m



S X 29 0 50cm

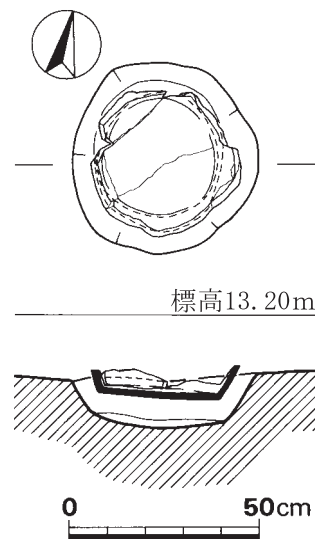
第3図 久留米城下町遺跡第22次調査遺構配置図 (1/100)、S X 29実測図 (1/20)

縁部 (24) や陶器碗 (25) がある。

SK3 (第3図) 調査区中央部で検出した、長辺長 1.6m、短辺長 80 cm、深さ 33 cmの隅丸方形の土坑である。SK2 同様に、真砂土が詰まっていた。陶器碗 (26) などの出土遺物の年代は、17 世紀に収まる。

SK4 (第3、11図) 調査区西壁にかかる、長さ 2.1m以上、幅 70 cm、深さ 40 cmの隅丸方形の土坑である。SK2・3 同様、この土坑の埋土も真砂土で、出土遺物の年代も 17 世紀代に収まる。ただし、土坑の軸はほぼ東西を走り、他の2基と若干異なる。

SK5 (第3、12図) 調査区東壁にかかる隅丸方形の土坑で、長辺長 2.5m、残存幅 45 cm、深さ 65 cmである。床面隅に柱痕がみられる。遺物は、19 世紀代が大半を占める。また、埴塙 (60・61) も出土した。



第4図 SK41実測図 (1/20)

SK6 (第3図) SK5に先行する隅丸方形の土坑で、長辺長 2.3m、短辺長 1.6m、深さ 38 cmである。埋土には焼土を含み、出土した瓦や土師器にも被熱痕がある。また、粘土塊やトチンが複数出土した。出土遺物の年代は、18 世紀に収まる。

SK8 (第3、11図) SK4に先行する方形土坑で、長辺長 1.7m以上、短辺長 1.2m、深さ 80 cmである。出土遺物の年代は 17 世紀前半に収まり、染付皿 (42) の破片はSK18・19 出土品と接合した。

SK18 (第3図) 調査区北側にかかる、円形と推測される土坑で、残存長 1.8m、深さは 80 cmを測る。遺物の年代の大半が 17 世紀前半で、洪武通宝 (72・73) も出土した。

SK19 (第3図) SK2を切り、SK18に先行する楕円形状の土坑で、長軸長 1.2m以上、短軸長 1.2m、深さ 48 cmである。出土遺物は少ないが、SK2・18の年代から、17 世紀に収まる。

SK23 (第3図) 調査区北側で検出した、直径 80 cm、深さ 70 cmを測る、円形土坑である。出土した陶磁器 (49～52) の年代は、17 世紀後半から 18 世紀に収まる。また、小判型の浅い銅製容器 (69) も出土した。

SK31 (第3図) 調査区南側壁面付近で検出した。後出する遺構が多く調査区外へ延びるため、全形は不明である。長軸長 1.2m、短軸長 45 cm以上、深さは 50 cmである。18 世紀後半の陶磁器に混じって、埴塙 (54) が出土した。

SK50 (第3図) 調査区中央で検出した、長軸長 4.65m、短軸長 2 m、深さ 57 cmの方形土坑である。19 世紀の土坑SK55、現代の土坑SK51に先行する。17 世紀後半の陶磁器が出土した。

SK57 (第3図) 調査区北側で検出した、残存長 1.6m、深さ 17 cmの、円形土坑である。SX29 など、複数の遺構に先行する。出土遺物の年代は、ほぼ 17 世紀後半に収まる。

その他の遺構

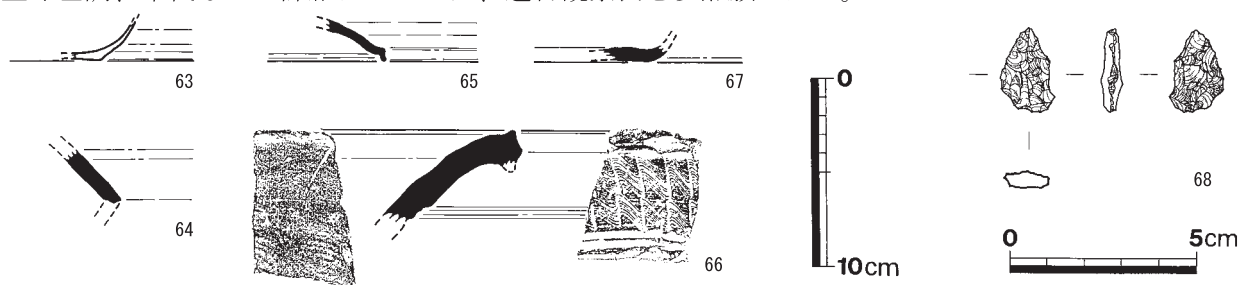
SX29 (第3、13図) 調査区北側で検出した、ほぼ現在の境界上を走る遺構である。南端は調査区外へ延びるが、長さ 1.65m以上、幅 60 cm、深さ 26 cmの溝に、片岩割石が詰められていた。遺

物は少ないが、17世紀後半の白磁小碗（58）や、18世紀代の陶器挿鉢片が出土した。

S X 41（第4、14、32図） S K 50 に後出する埋甕で、土師壁の甕の底部（59）のみが残存している。掘形の直径は50 cm、深さは最大で15cmである。検出状況と先行するS K 50の年代から、18世紀以降の便槽と思われる。甕の詳細は、出土遺物観察表2を参照されたい。

3. 出土遺物（第5・6、16～35図、第1・2表）

調査区全体で、パンコンテナ15箱分の遺物が出土した。大半が、近世から現代の陶磁器や瓦、土師器である。わずかに古代の土師器や須恵器（63～67）、これらを遡る黒曜石製の石鏃（68）や剥片が見られるが、いずれも黒色包含層から出土したか、近世の遺構へ混入したものである。個々の法量や色調、年代などの詳細については、遺物観察表を参照願いたい。



第5図 出土遺物実測図1（土器は1/4、石器は1/2）

第1表 出土遺物観察表1

遺物 No.	出土遺構	材 質	器 種	法 量			色 調（染付・釉薬）		調 整（文様）			胎土（製作地）	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面	底面・高台 内印銘等			
1	S X 7	土師器	胞衣壺	13.0	12.9～ 13.3	11.4～ 11.7	浅黄橙色		回転ナデ	ナデ・押え	ナデ	砂粒（長石、 石英、雲母）	幕末～近代	201241 000082
2	S X 7	土師器	蓋	15.5～ 15.6	13.3	2.7	にぶい橙色	橙色	回転ナデ	ナデ	ナデ	砂粒（長石、 石英、雲母）	幕末～近代	201241 000083
3	S X 9	土師器	胞衣壺	13.0～ 13.2	13.0～ 13.2	11.2～ 11.7	橙色	明褐灰色	回転ナデ	ナデ・押え	ナデ	砂粒（長石、 石英、雲母）	幕末～近代	201241 000092
4	S X 9	土師器	蓋	15.3～ 15.8	14.2～ 14.5	2.6～ 2.7	にぶい橙色	橙色	回転ナデ	ナデ	ナデ	砂粒（長石、 石英、雲母）	幕末～近代	201241 000093
5	S E 40	磁器	碗	14.5	4.8	6.2	色絵		—	椿・雪輪	砂付着	肥前	見込み蛇の目軸剥ぎ	201241 000166
6	S E 40	磁器	碗	[11.2]	[5.6]	6.8～ 6.9	染付		竹	線・渦	—	肥前		201241 000145
7	S E 40	磁器	瓶	1.7	4.0～ 4.1	12.1	染付		蛸唐草・連弁	—	砂付着	肥前	19 c ～	201241 000157
8	S E 40	磁器	皿	8.5	4.2	2.6	染付		—	菖蒲	—	肥前	輪花 見込みに三脚ハマ痕あり	201241 000154
9	S E 40	磁器	湯呑	6.8～ 7.1	4.3	6.0	染付		大根・鼠	大根葉	—		近代？、金彩	201241 000165
10	S E 40	陶器	碗	8.1	2.6	4.3	灰釉		—	—	—		18～19 c	201241 000169
11	S E 40	陶器	徳利	[3.3]	7.2	20.2	鉄釉		白釉かけ	—	砂付着			201241 000325
12	S E 40	陶器	徳利	—	7.4	(21.6)	灰釉鉄絵		菊	—	—			201241 000324
13	S E 40	陶器	ハマ	8.1～ 8.2	7.6	1.3～ 1.5	にぶい褐		ナデ・押え	—	型打ち		五脚	201241 000335
14	S E 40	陶器	碗	8.4～ 8.6	3.2～ 3.3	4.9	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000170
15	S E 40	陶器	碗	8.3	2.5	4.3～ 4.7	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000173
16	S E 40	陶器	碗	8.8	2.8	4.7	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000174
17	S E 40	磁器？	碗	[8.6]	2.6	4.2～ 4.4	染付？		不明	不明	不明		金属滓付着、 内面に銀付着か	201241 000176
18	S E 40	陶器	碗	11.4	—	5.3	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000179
19	S E 40	陶器	碗	—	4.3～ 4.4	(5.1)	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000177
20	S E 40	陶器	湯呑	7.0	3.7	6.0～ 6.1	灰釉		不明	不明	不明		金属滓付着	201241 000323
21	S E 40	土師器	灯明皿	[6.2]	4.5	1.1～ 1.2	浅黄橙色		回転ナデ	回転ナデ	糸切り	精良	油煙付着	201241 000338
22	S E 40	土師器	蓋	8.0	4.6～ 4.8	1.5	橙色		ナデ	ナデ	糸切り	精良		201241 000339
23	S E 40	土製品	人形	(4.5)	5.0	3.2	灰白色		型押し成形			精良	扇・そろばんを持つ福助か	201241 000336
24	S K 2	陶器	大甕	[24.2]	—	(10.1)	鉄釉		ナデ	当具痕	—	肥前	17 c 中～17c後	201241 000008
25	S K 2	陶器	碗	—	5.2	(3.7)	灰釉		—	—	砂付着	肥前	17 c	201241 000007

遺物観察表の〔 〕は復元値を、（ ）は残存値を示す。

Ⅲ. 調査の記録

第2表 出土遺物観察表2

遺物 No.	出土遺構	材 質	器 種	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)			胎土 (製作地)	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面	底面・高台 内印銘等			
26	S K 3	陶器	碗	—	4.8	(4.1)	灰釉		—		兜巾	肥前	17 c 前	201241 000009
27	S K 4	磁器	碗	—	3.9～ 4.1	(3.0)	染付		草花	線・花	兜巾	肥前	1650年代	201241 000011
28	S K 4	磁器	皿	[13.6]	[6.0]	3.4	染付		—		唐草	肥前	1640年代	201241 000012
29	S K 5	磁器	碗	8.0	4.0	6.2～ 6.3	染付		菊花・斜格子	線・五弁花	—	肥前	五弁花はコンニャク印判 18 c 中～19 c 初	201241 000034
30	S K 5	磁器	碗	8.6	3.5	5.3～ 5.4	染付		花・蝶	蝶	—	肥前	18 c 中～19 c 初	201241 000039
31	S K 5	磁器	皿	10.2	[5.8]	2.9	染付		亀甲・松	線・松	松	肥前	19 c 後	201241 000042
32	S K 5	磁器	皿	14.0	4.4	3.7～ 3.8	白磁		—	蛇の目釉剥ぎ	—	肥前	19 c 中	201241 000043
33	S K 5	陶器	皿	20.4～ 20.8	6.5	5.5～ 5.8	灰釉鉄絵		—	蛇の目釉剥ぎ	砂付着		見込み釉剥ぎに墨書「正」 「小」「口」	201241 000048
34	S K 5	陶器	ひょうそく	—	5.7	7.0	鉄釉		—	—	糸切り		底面に穴あり	201241 000050
35	S K 5	陶器	土瓶	10.8	14.8	14.3	鉄釉		—	—	ヘラ切り		18 c 後～19 c 前、 底面に煤付着	201241 000053
36	S K 6	磁器	皿	[12.0]	[6.8]	3.6～ 3.7	色絵		唐草	花唐草	不明	肥前	18 c 初、輪花	201241 000072
37	S K 6	陶器	ハマ	4.6	2.2	1.1	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	ヘラ切り			201241 000076
38	S K 6	陶器	ハマ	5.0	2.9	1.6	にぶい褐色		ナデ	ナデ	糸切り			201241 000079
39	S K 6	陶器	ハマ	4.8～ 5.0	4.5～ 4.7	0.4～ 0.5	浅黄褐色		ナデ・押え	ナデ・押え	—		砂付着	201241 000080
40	S K 8	磁器	碗	—	4.7	(2.6)	染付		不明	線・花	砂付着	肥前	17 c 中	201241 000084
41	S K 8	磁器	小坏	5.4	2.5	3.7～ 3.8	白磁		堅筋文	—	兜巾	肥前	1640～1650年代	201241 000087
42	S K 8	磁器	皿	14.5	5.4	3.4～ 3.6	染付		—	連弁・宝	—	肥前	17 c 後、45と同型品	201241 000089
43	S K 8	陶器	碗	—	5.4	(2.9)	灰釉		—	—	—	肥前	17 c 前	201241 000090
44	S K 18・19	磁器	小坏	[7.6]	3.2～ 3.3	5.0	染付		草文	—	兜巾・砂付着	肥前	17 c 前	201241 000097
45	S K 18・19	磁器	皿	[14.2]	[5.6]	3.5～ 3.8	染付		—	連弁・宝	—	肥前	17 c 後、42と同型品	201241 000098
46	S K 18・19	土師器	灯明皿	9.3～ 9.5	4.8～ 5.0	1.8～ 2.1	灰白色		回転ナデ	ナデ	糸切り		油煙付着	201241 000105
47	S K 18・19	陶器	火入	6.1～ 6.2	3.1～ 3.2	5.6～ 5.7	灰釉		白釉かけ	無釉	無釉	肥前	17 c 前	201241 000104
48	S K 18・19	陶器	皿	—	4.4～ 4.5	(1.6)	灰釉		—	砂目	兜巾	肥前	17 c 前、高台外に砂付着	201241 000099
49	S K 23	磁器	碗	9.6～ 10.0	3.9	5.2～ 5.3	染付		草花	—	—	肥前	18 c ?	201241 000108
50	S K 23	磁器	香炉	8.7～ 9.1	6.2～ 6.3	5.8～ 6.0	青磁・染付		波文	無釉	—		17c後?	201241 000112
51	S K 23	磁器	灰落し	6.1	6.2	6.9	青磁		—	—	—	波佐見系	17c後、口縁部に擦痕あり	201241 000114
52	S K 23	陶器	皿	[13.2]	5.2	4.3～ 4.4	灰釉		—	蛇の目釉剥ぎ	砂目		17c末～18c	201241 000115
53	S K 31	磁器	碗	[10.4]	3.9	5.0	染付		菊・格子	線・五弁花	—	肥前	18 c 後 五弁花はコンニャク印判	201241 000126
54	S K 31	土師器	埴埴	[7.5]	—	(3.8)	灰白色	灰色	ナデ	ナデ	—		内面に緑青付着	201241 000127
55	S K 50	磁器	碗	—	5.2	(4.0)	染付		不明	不明	文字		17 c 後	201241 000364
56	S K 50	陶器	皿	[28.2]	10.3	7.6	鉄釉		—	砂目	ヘラ切り	竹尾窯系	17 c 後	201241 000367
57	S K 57	磁器	碗	[9.4]	[4.8]	7.2～ 7.4	青磁		—	—	不明		17 c	201241 000390
58	S X 29	磁器	小坏	5.8～ 6.0	2.6～ 2.7	3.0～ 3.3	染付		草文	—	—	肥前	17 c 後、体部に砂付着	201241 000122
59	S X 41	土師器	便槽	—	33.5	(10.3)	黄褐色	浅黄褐色	ハケ目	ハケ目	ヘラ		18 c ～	201241 000360
60	S K 5	土製品	埴埴	—	—	—	黒灰色					砂粒含む	金属滓付着	201241 000059
61	S K 5	土製品	埴埴	—	—	(3.1)	黒灰色					砂粒含む	金属滓付着	201241 000060
62	北側遺構 検出時	土製品	埴埴	—	—	(4.1)	黒灰色	灰色		ナデ	—	砂粒含む	金属滓付着	201241 000409
63	北側遺構 検出時	土師器	坏	—	—	(2.1)	橙色	黄褐色	ナデ	ナデ	ヘラ切り?	精良	9 c 前	201241 000406
64	北側遺構 検出時	須恵器	長頸壺	—	—	(2.9)	褐灰色	灰色	ナデ	ナデ	—	精良	8 c 後	201241 000410
65	S K 8	須恵器	坏蓋	—	—	(2.2)	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	—	精良	8 c 後	201241 000091
66	S K 18・19	須恵器	甕	—	—	(4.8)	灰色	褐灰色	ナデ	ナデ	沈線・波状文	精良		201241 000101
67	北側表土	須恵器	坏	—	—	(0.85)	灰黄色	暗灰黄色	ナデ	ナデ	—	精良	8 c 後	201241 000432
68	S K 50	石器	打製石鏃	(2.1)	(1.45)	0.55	黒曜石						重量：1.3 g	201241 000368
69	S K 23	銅製品	容器	5.3～ 10.5	4.2～ 8.8	1.9～ 2.1							重量：17.6 g	201241 000117
70	S E 40	銅製品	銅屑	—	—	—							重量：3.1 g (合計)	201241 000352
71	S E 40	銅製品	銅屑	—	—	—							重量：5.7 g (合計)	201241 000353
72	S K 18	銅製品	銭貨	(2.2)	(2.1)	(0.1)							重量：1.2 g	201241 000106
73	S K 18	銅製品	銭貨	(1.9)	(2.1)	(0.1)							重量：1.0 g	201241 000107
74	S X 1	銅製品	銭貨	2.3	2.3	0.1						半銭	重量：3.0 g	201241 000003
75	S E 40	銅製品	銭貨	3.2	3.2	0.2						二銭	重量：12.9 g	201241 000351

IV. 総括

近世の町屋と町屋境

本調査区では多数の土坑が検出されたが、これらは出土遺物から、17 世紀代の土坑と、18 世紀以降の土坑に分類できる。前者のような土坑は、正保 3 年（1646）に完成した、通町十丁目の整備に伴う遺構と思われる。この時期の土坑には、真砂土が詰められたものがあった。江戸時代の商家の家訓や日記には、火事に備えて日頃から水や砂を溜めておくよう説いた記述が見られるが、真砂土が詰められた土坑は、消火のための砂を溜めていたものかもしれない。後に幾度も起きることになる大火に対する、町人たちの備えが窺える。

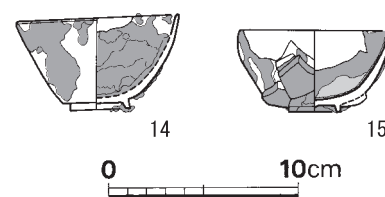
S X 7 ・ 9 は胞衣埋納遺構だが、胞衣を容器に入れて埋める風習は、福岡県下では明治 20 年代から大正末期まで広く記録されている。久留米地方でも、建物裏手の普段踏まない敷居下に、胞衣を入れた素焼きの容器を埋める風習があったという。S X 7 ・ 9 は、調査区北側を走る現在の道路から約 6 m の場所に埋納されている。また、検出した遺構の大半が現在の道路から約 7 m 以上離れて分布する。栗石の分布からも、S X 7 ・ 9 付近には裏庭近くの敷居があったのかもしれない。

調査区北側では、境界とほぼ一致する場所に S X 1 と S X 29 が走る（第 3 図）。久留米城下町遺跡第 1 次調査でも、礎石の位置から復元された町屋の建物の間を、溝状の集石遺構が走っていた。このことから、S X 1 ・ 29 が町屋境の遺構である可能性が高い。S X 1 の年代は 19 世紀、S X 29 の年代は 17 世紀後半で、S X 1 が S X 29 の上を走る。これらから、町屋境の溝が 17 世紀後半に築かれ、少なくとも 1 回作り変えられて、今日の土地境界に踏襲されてきたと思われる。

久留米城下町遺跡では、第 2 次調査や第 12 次調査、第 19 次調査で町境の石組溝が検出されているが、町屋境は町境のような石組を有する規模の遺構ではない。その整備や保守管理も、町ごとではなく個々の店子によって行われていたのであろうか。

金属加工に関する遺物

今回の調査では、金属加工に関する遺物の出土が目立った。いずれも 18 ～ 19 世紀の遺構から出土し、特に S E 40 では、金属滓が溶着した陶磁器（第 6、19 図）が、細片まで含めると 253 個も出土した。今回出土した陶磁器碗には、特に加工は見られないが、付着した金属滓が緑青を吹くほか、銀と思われる白色を帯びるものもある。従って、これらの陶磁器碗は埴塼に転用されていたと考えられる。鍛冶炉などは検出していないが、同時期の井戸が多いことも、水を大量に用いる金属加工に関連するかもしれない。これらから、18 ～ 19 世紀に埴塼を用いた、小規模な金属加工が行われていたと考えられる。久留米城下では、久留米城外郭遺跡第 19 次調査 S D 30 ・ 39 ほか（17 世紀前半）や久留米城下町遺跡第 20 次調査 S K 8 ・ 15 ほか（17 世紀前半～18 世紀中頃）、庄島侍屋敷遺跡第 4 次調査 S E 40（18 世紀後半～19 世紀）でも近世の埴塼が出土している。これらは年代が異なるが、陶磁器碗に比べて法量が小さいことは共通する。溶解する金属の量に応じて、埴塼と陶磁器碗を使い分けていたと想定される。



第 6 図 出土遺物実測図 2（1/4）



第7図 調査区北側東壁土層（北西から）



第8図 調査区北側上層全景（北西から）



第9図 S X 7 荒縄検出状況（南から）



第10図 S E 40検出状況（北西から）



第11図 S K 4・8 完掘状況（東から）



第12図 S K 5 検出状況（南から）



第13図 S X 29検出状況（北から）



第14図 S X 41検出状況（南から）



第15図 調査区全景（北西から）



第16図 S X 7・S X 9 出土土師器（胞衣壺）



第17図 S E 40出土磁器



第18図 S E 40出土陶器



第19図 S E 40出土金属滓溶着陶磁器



第20図 S E 40出土土師器



第21図 S K 2 出土陶器（大甕）



第22図 S K 2～4 出土陶磁器



第23図 S K 5 出土磁器



第24図 S K 5 出土陶器



第25図 S K 6 出土陶磁器



第26図 S K 8 出土陶磁器



第27図 S K 18・19 出土陶磁器、土師器



第28図 S K 23出土陶磁器



第29図 S K 31出土磁器・埴塙



第30図 S K 50出土陶磁器



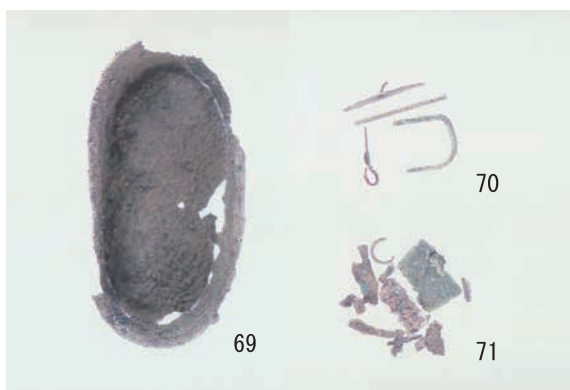
第31図 S K 57・S X 29出土磁器



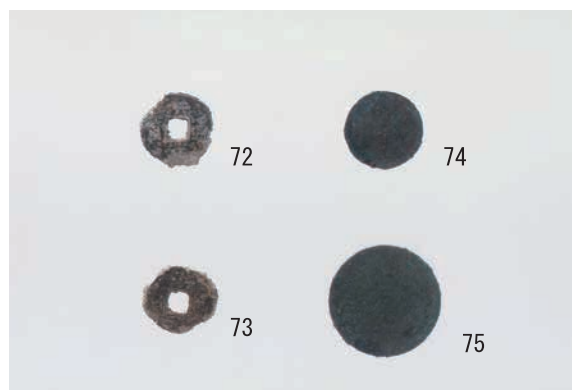
第32図 S X 41出土土師器（埴塙）



第33図 調査区内出土埴塙



第34図 S E 23・S K 40出土銅製品



第35図 調査区内出土銭貨

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうかまちいせき	だい22じはっくつちょうさほうこく
書 名	久留米城下町遺跡（通町十丁目）	— 第22次発掘調査報告 —
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第337集	
編 著 者 名	西 拓巳(編)・古賀 和子	
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課	
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp	
発 行 年 月 日	2013（平成25）年 9 月 30 日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
くるめじょうかまちいせき 久留米城下町遺跡 第22次調査	くるめし 久留米市 とおりちょう 通 町		40203	—	33 ° 18 ' 57 "	130 ° 31 ' 23 "	2012. 12. 25 } 2013. 1. 18	71 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		特 記 事 項	
久留米城下町遺跡 第22次調査	集落	古代 近世	井戸	4 基	土師器、須恵器、近世		城下町の町屋境を検出。 金属加工に関する遺物が多 数出土。		
土坑			23基	陶磁器、土製品、金属					
埋甕			1 基	製品、石器					
境界遺構			2 基						
要 約									
本調査区は、筑後川左岸上にあり、城下町の通町十丁目に位置する。調査区内を現在も境界が走っており、ほぼ同位置から石を詰めた溝を2基検出した。これらは近世から近代の町屋境と思われ、少なくとも1回改築されたことが窺える。また、井戸から出土した、銅滓が付着した陶磁器碗をはじめ、埴塼などの金属加工に関する遺物が多数出土した。									
土木工事の届出日		平成24年12月11日			遺物の発見通知日		平成25年1月23日 (24文財第1200号)		

久留米城下町遺跡

(通町十丁目)

— 第22次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第337集

平成25年9月30日

発 行 久 留 米 市 教 育 委 員 会
編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課
印 刷 永松印刷
久留米市中央町20-22